

焼岳道迷い(2008年8月)

雨が降っていたため、滑りやすい足元だけを必死に見ながら登って行く。少しぐらい間違えても登って行きさえすれば、登山道に出ると思い、道なき熊笹の藪を突き進む。「おかしい、おかしい・・・」とは思いつつも一向に登山道に辿りつかない。山中で1泊した。翌日もさらに熊笹の藪を登り、熊鈴の音が聞こえたのでそちらの方へ行くと、やっと登山道がでてきた。



解説

登山口から間違えるパターン。実はよくある話し。登りだして30分経過ごろから違うと思い始めていたが、「どうせ、登って行けば、登山道に出る」という「なんとかなるわ説」は道迷いの初期の考えであり、「進め！」という行動をとらせる。

2~3時間経過すると「戻った方がいい」という考えが出てくる。この段階で、二人の自分が存在する。ここが遭難の「ターニングポイント」である。ここで、30分休憩し、今後の行動を考えると遭難の確率は低くなるのだが、道迷いはそれを許さない。

「①体力の低下 ②今後の不安 ③単独行 ④なんとかなるとい希望 ⑤装備(食糧、テント持参)も充実」というマイナスとプラスの複雑な要素が行動を占領する。道迷いの多くは、自分の中の二人と常に戦い続けるものである。そして、体力の低下とともにマイナスの自分が行動を占領し、希望的観測の行動をとる。

さて、このルートは日本のアルプスである。道迷いをした場合、低山とは違うリスクが多く潜んでいる。目的(例えば、冬山のパリエーションルートの偵察等)以外の藪こぎは、すでに道に迷っていて、遭難の序章と言わざるを得ない。